〔東北古代史研究講座〕

# 蝦夷の呼称・表記をめぐる諸問題

## ――第一回　研究史と課題――

荒木陽一郎

### はじめに

いわゆる蝦夷について呼称（訓読・音読）する場合、通常〝エミシ〟や〝エゾ〟といった語を使用する。このほか〝エビス〟〝エミス〟という語もあり、一般的にはエミシ→エミス・エビス→エゾといった時間的変遷をたどったと考えられている。一方、エミシ（エミス・エビス・エゾ）と呼称されるものが、どのように表記されているかを見ると、「蝦夷」を主として、「毛人」「夷」、さらには「狄」「俘囚」等など多岐に亘る。

こうした呼称や表記は、いつどの時代でも同じように使用されているわけではなく、徐々に変遷した。その変遷は、東北地方に対する古代国家の意識・政策の変化、ひいては古代国家そのものの変化の反映とも考えられよう。近年、表記のうちの「俘囚」と「夷俘」について詳細な分析を行った平川南氏は、「蝦夷という概念は、中国の華夷思想を移入し、古代国家の支配体系の中に位置づけられたものであり、その複雑な呼称は在地の動きを覆い隠し、その実態を解明する上で、かえって、大きな障壁となっている」とし、「蝦夷の実態解明とともに、蝦夷研究の一つの方向としては、観念的産物であるがゆえに、あえて史書の中での蝦夷に関する呼称、例えば、これまでにも多くの整理が試みられている俘囚と夷俘の呼称の問題、蝦夷・毛人等の使用法など、数多くの研究課題をさらに明確にすべきではないかと思われる。」と述べているが、[1] 本稿における私の問題意識もまさにこの点にある。

ところで注意すべきことが一つある。それは、呼称と表記とを混同してはならない、という点である。

例えば、古代の家族を考える際の手段として、「親族呼称」からアプローチする方法があるが、漢字表記と和訓は必ずしも一対一の対応を示さないし、双方ともに独自の変遷があり、独自の歴史性を持っている。[2] 和訓「ヲチ」という一つの呼称を例にとってみると、これに対応する表記には「伯父」「叔父」「伯」「舅」「伯叔」などがある。この場合、呼称ヲチは人類学的には「直系型」に分類でき、日本の基層文化を示しているのに対し、表記で「伯父」「叔父」を区別するのは「分枝傍系型」に分類でき、[3] 律令制の導入などによって政治的に普及した大陸（中国）的な制度を示している。逆に、表記「姨」を見ると、その和訓は「ハハカ

タヲハ」「ヲハ」「コシウトメ」「イモシウトメ」「ヨメ」と多様である。ここからは、時代と共に「姨」観が変化し、呼称もそれに伴って変化したことが推察される。

蝦夷に関しても同様の分析視角が必要であろう。数少ない限られた史料、それも自らの手によるものでなく、自分たちを経営した側の残した史料から、蝦夷の社会にアプローチする場合、史料が物語る現象面（事件等）の考察も重要だが、国家の中枢にいる貴族たちの蝦夷観の変遷が如実に反映するところの表記・呼称の研究は、もう一つの重要な柱であると考える。後にもふれるが、表記ならびに呼称の個別研究はこれまで数多く行われてきた。しかし、諸説を研究史的に踏まえた上での立論や通史的な検討、さらに言うならば、呼称と表記の相互関連の研究は、決して完全なものとは言えないのが現状である。

本稿では、以上の問題意識から、蝦夷の表記及び呼称に関する基礎的な考察、まずその手初めとして総括的な研究史の検討を行ってみたい。

なお、既に用いているが、史料などに見られる表記は「」付きで書き、言葉の発音（呼称）は〝エミシ〟のように片仮名書きで示すこととする。それ以外の、「」の付かない〝蝦夷〟は一般的な意味[4]（例えば蝦夷論などという場合）で用いている点をあらかじめお断りしておく。

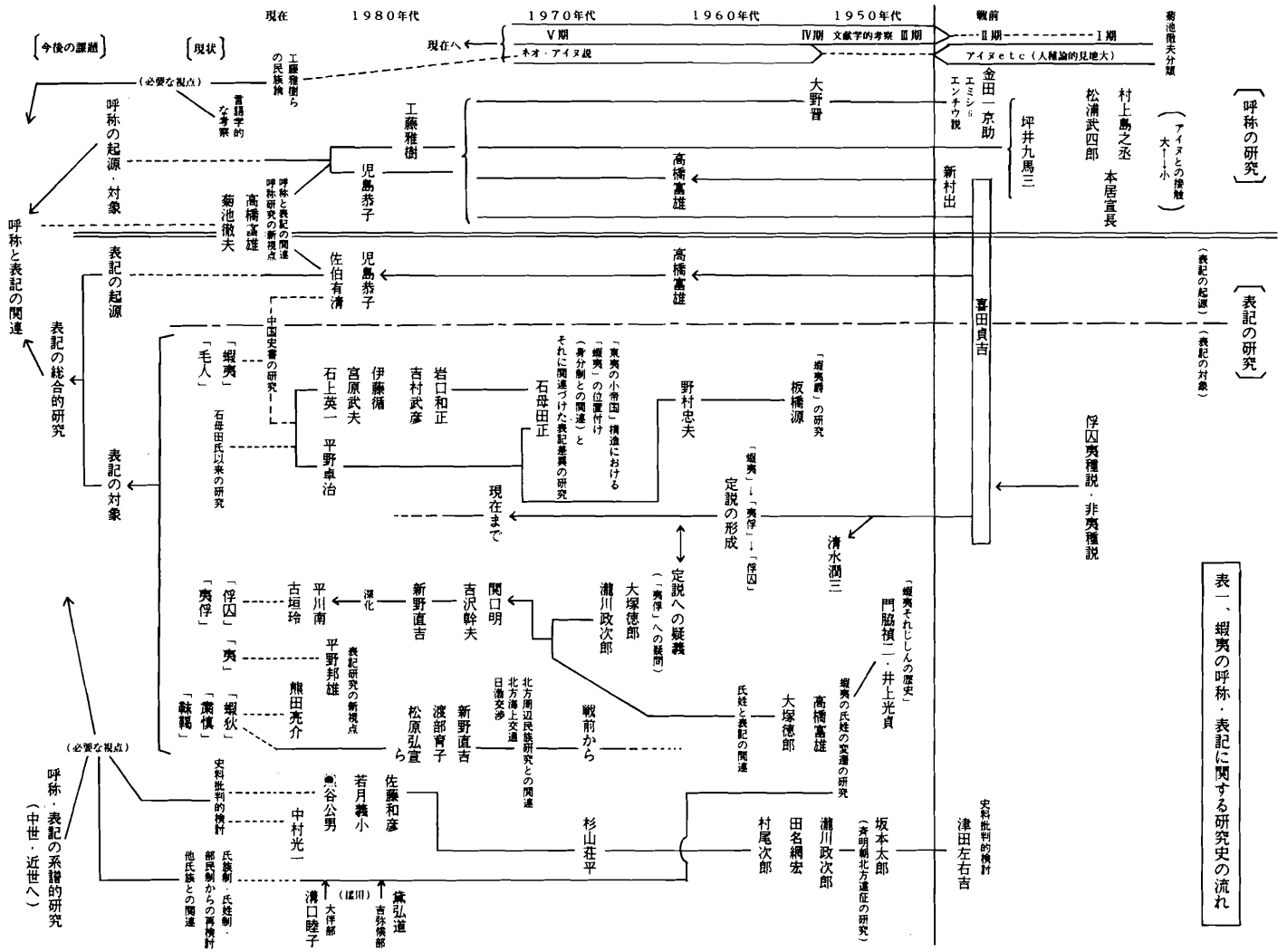
## 一、蝦夷の呼称・表記に関する研究史的検討

ここでは蝦夷の呼称・表記に関するこれまでの諸論を、いくつかの視点のもとに研究史的に分析し、研究の現状、さらに今後の研究への展望を導き出すことを目的としている。なお、研究の大きな流れを表にまとめてみたので（表一）[5]、以下随時御参照いただきたい。

### ①戦前の研究

この時期は、菊池徹夫氏が「蝦夷論の系譜」の中で蝦夷に関する研究を五期区分しているうちのⅠ期からⅡ期にあたる[6]。Ⅰ期・Ⅱ期全般を通して言えることは、人種論・種族論的見地の占める割合が大きかった時期、という点であろう。Ⅰ期の人類学を中心とした「攘夷主義的な蝦夷アイヌ説」の流れが史学にも拡がり、Ⅱ期には蝦夷アイヌ説の全盛を迎えるが、やがて皇国史観の影響により国家主義・民族至上主義的な蝦夷日本人説が有力になった。詳しくは菊池氏の考察に委ねるとして、ここでは、蝦夷の研究は必ず人種論・種族論と関連していた、という点を念頭において論を進めたい。

まず表記に関してだが、「蝦夷」は〝異種族（アイヌ）である〟という既成概念のもとに、検討の対象外とされ、専ら「夷俘」「俘囚」に焦点があてられ、特に「俘囚」がアイヌか否かが論争の中心であった。個々の研究に見られる論拠の相違は、当時の史学の発展とも密接に関連していた。例えば沼田頼輔氏の研究は、『大日本史』や『古事記傳』を主たる根拠として「俘囚夷種説」を展開するなど、江戸時代の国学者の説の踏襲といった感も強かった[7]。それに対し「俘囚非夷種説」を示した萩野由之氏の説は、『江次第抄』の説をうけつぎながらも、原史料に基づく考察を行っている点や、「蝦夷」「俘囚」「新獲之夷」に対する処遇がそれぞれ異なるという『日本後紀』弘仁二年十月甲戌条に着目したり、




表一、蝦夷の呼称・表記に関する研究史の流れ

「夷俘」と「俘囚」には姓名にも別があるといった指摘をしているなど、[8]そこには実証的史学研究の萌芽が見られる。

これらを受けて登場するのが喜田貞吉氏である。[9]喜田氏の注目すべき点は「夷俘」「俘囚」のみならず「蝦夷」や「田夷」その他、ほとんどの表記を検討の対象としたこと、それら表記に質的差異を認め、その違いを説明するのに、時間的前後・場所的遠近を含めた「王化の度合い」という概念を導入したこと、などであろう。後でも触れるが、喜田氏の研究は、その詳細に渡って戦後にその影響を及ぼした。特に「蝦夷」→「夷俘」→「俘囚」を内民化の段階と考える説などは定説化し、現在にまで至っているほか、喜田氏に学ぶべき視点は数多い。

以上は、各表記が何を指しているかを問題にしており、「表記の対象論」とも言うべきものである。それ以外に表記の研究には、各表記の成立・由来を考える「表記の起源論」の問題があるが、ごく最近に至るまで、表記の起源に関しては、唯一「蝦夷」のみが考察の対象だった。

さて、最近議論が活発化しているこの起源論だが、それにまつわる諸説の原型は、既に戦前に述べられていた。[10]それは大別すると次の二点になろう。

＊「鰕」（髭が長い＝多毛、卑賤などの象徴）→「蝦（夷）」

……戦前は本居宣長、[11]村上島之丞、[12]松浦武四郎[13]らが提唱。最近では高橋富雄氏、[14]佐伯有清氏[15]らが支持（細部は異なるが）。

＊カイと呼ばれている集団の音訳文字表記→「蝦夷（カイ）」

……戦前には、熱田縁起頭書の「加伊」、中国史書の「庫葉」「庫野」をアイヌの自称とし、その音訳が「蝦夷」だとした喜田貞吉氏・[16]金沢庄三郎氏[17]がいる。少し時代は下るが、元代から清代の史料に見られる骨嵬（k'uwei）、苦兀（k'uwu）、苦夷（k'ui）、庫野（k'uyeh）、庫頁（k'uyeh）、庫葉（k'uyeh）は、ギリヤークがアイヌを指して呼ぶkuriや、黒竜江下流域の諸民族がアイヌを指して呼ぶkuiに比定されている。戦中～戦後にかけては、和田清氏がここから遡源させて、『唐会要』靺鞨条や『新唐書』黒水靺鞨伝の「莫曳皆部」の「皆」を「蝦夷」の別訳であるかも知れないと推測している。[18]最近では菊池徹夫氏の論文「蝦夷（カイ）説再考」に詳しいほか、[19]児島恭子氏がこれらに近い説を採っている。[20]

両説ともアイヌ民族が関連してくる点では共通しているが、前者と後者では表記成立の背景が大きく異なっているし、さらにいずれの場合も、中国で成立したのか日本で成立したのか、といった点がこれに絡んできて、問題は複雑化している。

次に呼称に関してだが、表記研究の喜田氏と並んで、この方面に多大な影響を残したのが金田一京助氏である。金田一氏はエミシの語源をカラフトアイヌ語雅語で、自称である“enchiu”（エンチウ）に求めた。[21]呼称に関しては本居宣長以来、それまで村上島之丞、松浦武四郎、坪井九馬三氏[22]らの説があったが、金田一氏の説は、菊池氏の分類で言うII期―すなわち蝦夷＝アイヌ説全盛期の学問的風潮に良くとけ混み、支持を得た。彼の説は戦後、国語学者の大野晋氏[23]が受け継いだが、他にエミシの語源を説明する明確な研究が出てこないこともあってか、歴史学者の間でも現在に至るまで多く支持されている。[24]

②戦後の研究（1）―50年代から60年代にかけて―

「われわれの現実は、「蝦夷」の歴史について、それじしん伸びようとする「蝦夷」の社会と、古代天皇制を核心とする古代国家の東北地方への律令制的支配の拡充、この両者のきびしい接触を、古代史の政治過程の中に、「蝦夷」農民と律令農民の古代権力に対する激しい抵抗と闘いを通して分析することを切実に要請している。」という門脇禎二氏の提言[25]に代表されるように、「蝦夷それじしんの歴史」を念頭においた研究が発表された時期である。代表的な研究としては、高橋富雄氏・大塚徳郎氏らの古代東北における氏姓の変遷の研究があげられよう。

高橋氏は「辺境における貴族社會の形成」で、内民化したもしくは内民化過程にある蝦夷が、在地の土豪層の一部となって、改氏姓によって律令貴族ないしは官僚になる、と述べ、その中でも、部姓の差や内民化の度合、律令体制に接した歴史の深浅によって、氏姓が異なる点を指摘した。[26]高橋氏は、大化前代、古くから中央と接していた蝦夷は、部民の形成時に特定の氏族のもとに集団的に組織されたとする。例えば毛野氏のもとに結集された品部「吉弥侯部」や、「丈部」「大伴部」がそれである。彼らは広く「俘囚」と称されるが、こうした部民相互に内民化の度合の差が現れ、より内民化した「丈部」「大伴部」を「俘囚」、度合の低い「吉弥侯部」を「夷俘」と称した。やがて彼らは阿倍、毛野、大伴などに改氏姓し、中央と接した歴史の浅く在地的な新姓を与えられた蝦夷に比べ、優位だったとしている。

続いて「古代蝦夷の政治的社會」では、以上の点を継承し、「蝦夷族長」を次の六つの型に分類して、発展段階（a→f）を論じている。[27]

aヒトコノカミ型（自然発生的な原始村落の長、抗争を重ねる集団の分裂→統一）

b俘長型（独立した蝦夷集団の指揮者）

c蝦夷郡司型…（表裏一体）…d田夷姓型（君・公姓を持つ）

e律令貴族型（朝臣・臣・連へ改姓）

f複姓型（中央貴族氏名＋在地（國）郡名＋律令貴姓名）

一方大塚徳郎氏は、高橋氏と前後して「丈部・吉彌侯部について」[28]などの論考を発表したのち、一九六九～七四年に相次いで説をまとめている。[29]大塚氏は、氏姓・部姓の分布上から見て陸奥国を四地域に分け、蝦夷服属の四類型とを関連させて考察した。その四類型とは、

a丈部的服属（多くは旧国造地帯）

b丸子部・大伴部・君子部的服属（多くは旧国造地帯）

c俘囚吉弥侯部的服属（bの君子部の後身である吉弥侯部とは異なる）（bより北方の地域）

d（現地名）＋君（公）的服属（cと重なるがさらに北方へ）（のちに俘囚（現地名）＋君…蝦夷爵、さらに俘囚（現地名）＋君…位階へ）

である。このうち蝦夷と関係してくるのはcとdで、現地の有力な族長を郡司などにして、その組織のまま土着させたものはd、一方組織を持たない服属者はcとした。大塚氏はcとdに対する施策の相違として、平和的共存の時代には、cは全国へ移配（もしくは現地で把握）し、dは現地で組織のまま把握したのに対し、その後の軍事的征服の時代にな

ると、cは俘軍として利用するために当土安置し、dは現地から離し組織を壊して多く他の国へ分置し帰化させる、といった政策転換が謀られた、とした。

以上の高橋・大塚氏の研究は、「蝦夷」や「俘囚」・「夷俘」といった表記を直接取り扱うのではなく、むしろそれらを冠する人々の氏姓の分類研究からアプローチした点で注目できよう。また、戦前の人種・民族論的視点を排除し、表記の多様性を律令国家と蝦夷との関係に求めた点で、後の研究に多大な影響を及ぼしたのである。例えば大塚氏のcとdのような分類は、のちに関口明・吉沢幹夫・平川南氏らが行った、表記「蝦夷」には現地名＋君で蝦夷爵が付随し、「俘囚」には吉弥侯部姓で位階が付随する、という二タイプに分類する研究の祖型となったものである。

ところで大塚氏は、表記「蝦夷」は「未服のもの」、「俘囚」は「ある程度内民化したもの」と区別したが、表記「夷俘」に対し、かねてから指摘のあった性格の不明確さ[30]に加えて、個人名に冠されることがほとんどない点を指摘した。そしてその理由として、「夷俘」は通説どおり「蝦夷」（大塚氏は「夷」とする）と「俘囚」の間に位置する語ではあるが独立した身分を指す用語ではない、と独自の見解を示し、「夷俘という語は、しばしば蝦夷＋俘囚、すなわち両者をあわせて称する場合に使用される」とも述べている。

一九六〇年前後の当時は、戦前の喜田説を受けて、内民化の度合によって「蝦夷」→「夷俘」→「俘囚」という段階をたどる、という表記に関する説がほぼ〝定説〟化した時期でもある（傍線筆者）。歴史辞典類の解説をみても板橋源[31]・高橋富雄[32]・新野直吉氏[33]らが皆この説を採用している。しかし、その一方で定説に内在する矛盾、すなわち「蝦夷」や「俘囚」と比べた際の「夷俘」の特種性が、いま述べた大塚氏のほかにも瀧川政次郎氏[34]、高橋[35]・新野氏[36]らによって指摘され始めた。この「夷俘」に対する問題意識の高揚と、それに対する解答が、続く七〇年代後半～八〇年代前半の研究である。

さて、以上長々と高橋・大塚説を見てきたが、簡単にまとめてみよう。

この時期は「蝦夷それじしんの歴史」の視点のもとに、蝦夷内部を細かく分類する試みが成された。その方法は、蝦夷特有の部姓・氏姓・位爵の分類・変遷ならびに、彼らに対する施策の相違の研究である。そうした中で、「蝦夷」や「俘囚」といった表記は特定の氏姓・位爵と結び付くことが明らかにされた。一方、表記「夷俘」が「蝦夷」や「俘囚」と異なる性格を持つ点が指摘され始め、「夷俘」への疑問が高まったのもこの時期であった。

ところで、それ以外の研究としては以下の人物がいる。

まず、喜田氏の研究を批判的に継承した清水潤三氏は、この時期衰退した人種論の中で、一人気を吐き、蝦夷アイヌ説を本格的に展開する[37]。清水氏の特徴的な点は二つある。一つは『日本書紀』から江戸時代に至るまでの表記を対比的に検討した点である。清水氏の対比は、古代から近世まで通して三種の蝦夷が存在し変化がなかったことが前提になっており、とても継承はできないが、表記の系譜的変遷をたどった点は、現在に至るまで他に見られず、評価すべきことと思う。二つめは、「山夷」「田夷」を検討の対象として重要視した点である。それは清水氏の蝦夷

観の根底に〝奈良時代になってもまだ狩猟・採集を生業として、縄文土器を使用している人々〟という観念があったことにも起因していよう。清水氏は、「夷」が官軍と交渉を持つと「山夷」になり、「山夷」が内民化し、本来の生業を変えて農耕に従事すると「田夷」になる、と考えた。縄文土器の使用云々は問題外として、農耕の有無と内民化の度合は、その後の研究者に受け継がれていった。[38]

このほか、大野晋氏が金田一氏のエミシ＝エンチウ説を継承したのもこの時期であるし、[39] いわゆる〝蝦夷爵〟について正面から扱った研究が板橋源氏[40]・野村忠夫氏[41]らによって初めて報告されたのもこの時期であった。さらに、一九六三年には高橋富雄氏が『蝦夷』を発表し、その時点までの表記ならびに呼称研究の研究史的整理をしている。[42]

①戦後の研究（2）―70年代から80年代―

一九七〇年代に入ると、石母田正氏によって、古代世界における「帝国主義」概念の導入の提唱と、国家史における国際的契機の重要性の提示がなされた。[43] 石母田氏は、日本の律令制国家が、化外［隣国（唐）、蕃国（高句麗・新羅・渤海）、夷狄（国家を形成しない集団・隼人や蝦夷など）］、と化内といった帝国的な領域構造を持っていた、と述べた。それにともない、化外の地でも特に化内の周縁、あるいは化外から化内への移行地帯に居住する「夷狄」内部の差異性・身分的多様性が、重要な研究課題として浮かび上がった。特に、同じ「夷狄」の中でも、隼人と異なり蝦夷は、その内部に「蝦夷」「俘囚」「山夷」「田夷」など、さまざまな表記・呼称の人間集団を析出していく点で、より複雑な支配を受けたと考えられ着目を浴びる。つまりここにおいて、「蝦夷じしんの歴史」の視点とは全く対極の「国家形成史」的視点から、蝦夷の表記・呼称が見直され、「東夷の小帝国」構造における「夷狄」支配研究の一貫として、検討されるようになったのである。

石母田氏の視点を受けた蝦夷研究は、八〇年代に入ってしばらくすると次々に発表される。以下主な研究を列挙するならば、次の通りである。

一九八四年……吉村武彦氏「古代の社会構成と奴隷制」[44]
石上英一氏「古代国家と対外関係」[45]
八五年……平野卓治氏「律令位階制と「諸蕃」」[46]
八六年……宮原武夫氏「律令国家と辺要」[47]
伊藤循氏「律令制と蝦夷支配」[48]
八七年……石上英一氏「古代東アジア地域と日本」[49]
平野卓治氏「日本古代における位階と「蝦夷」」[50]

また、今泉隆雄氏「蝦夷の朝貢と饗給」[51]も、問題意識の出発点は石母田氏の研究にある。

ただ、これらの研究も現時点では、蝦夷に関する表記・呼称の研究史を十分踏まえて立論しているとはいい難く、とりあえず定説に拠っているものや、吉村氏のように〝農耕〟を重要視して「田夷」を特別視するなどの傾向も見られる。逆に、蝦夷に関する表記・呼称そのものを研究した論文に、石母田氏以来の「国家形成史」的視点が欠如していたのも事実である。今後は、以上の点をふまえ、より多面的な研究の必要があろう。

さて、七〇年代末から八〇年代初頭になると、高橋・大塚氏による蝦

夷特有の部姓・氏姓・位爵の分類・変遷の研究を継承しつつ、再び「蝦夷」「俘囚」などの表記研究が活発化する。関口明氏[52]・吉沢幹夫氏[53]・新野直吉氏[54]が相次いで発表した説は、六〇年代に沸き上がった「夷俘」表記の特種性への三者三様の解答でもあった。この三説の検討は平川南氏の論文にも詳しいので[55]、ここでは省略させていただくが、結論だけ述べておきたい。関口・吉沢氏共に、大塚氏同様に「蝦夷（夷）」型（「地名＋君」姓および蝦夷爵を持ち、当土安置される）と「俘囚」型（「吉弥侯部」姓および位階を持ち、地方移配される）に分け、それぞれが異なった公民化プロセスをたどる、とした点では共通している。そのプロセスも、関口説はより詳しい吉沢説に包括され、大差はない。相違点としては、両型へ分類する基準として、関口氏が服属年代と居住地をあげ、吉沢氏は服属時の形態をあげている点、ならびに「夷俘」を、関口氏は「蝦夷」「俘囚」と同様ひとつの身分と見るに対し、吉沢氏は「夷」と「俘」の総称としている点があげられる。両型への分類基準は、両氏とも一面の妥当性と一面の論拠不足があり、「なぜ両型に分類する必要があったのか」という点を含めて、細かい点で検討すべき箇所が残された。ただ「夷俘」の解釈に関しては、ひとつの身分と見る通説の呪縛から解き放たれた吉沢氏の解釈がすぐれていた。吉沢説と比較すると、後に発表された新野氏の「俘囚」と「夷俘」を同義と考える説は、「夷俘」に関する問題点の一部についてのみ解答したにすぎなかった。

このほか、身分制の観点から表記に言及した岩口和正氏[56]、民衆教化の観点から表記に言及した小林茂文氏[57]らの研究がある。前者は、石母田氏の「王民共同体」の理解を批判し、「俘囚」に「王化を慕って帰降した化外人」と「常に王権に敵対する夷狄の俘虜」の二重の性格を付与した点で注目される。後者は、「夷俘」をひとつの身分と考えている点など問題がある。また七九年には、表記「山夷」「田夷」を中心に取り扱った点では初めてと言える論考、新野直吉氏の「山夷と田夷」が発表されている[58]。

ところで、戦後八〇年代に至るまでの表記の研究は、これまで述べたように、氏姓制・部民制ならびに国家形成史的研究などの関連分野と接触・融合し、広がりを見せたが、一つの盲点もあった。それは、一九八四年に児島恭子氏が指摘した次の一文に集約されよう。「…蝦夷論においてエミシが「蝦夷」と書き表されるようになった意味を明らかにすることは基本であるとされ、また蝦夷観念の歴史的変遷を念頭において論じることが基本的な態度だとされているにもかかわらず、従来の蝦夷論では「蝦夷」という表記が現れた理由についてさえ十分に納得できる説明がなされていないと思われることである。[59]」

つまり、表記の起源研究が、戦前からほとんど停滞していたのである。戦後はわずか、一九六三年の『蝦夷』・七四年の『古代蝦夷』の中で高橋富雄氏が、表記「毛人」「蝦夷」と呼称エミシ・エゾの起源を論じているのと、一九八二年に工藤雅樹氏が呼称エミシの語源（起源）について、戦前の研究を整理し、自らも意見を述べている程度である[60]。児島氏は「蝦夷論序章」と題し、研究史をふまえつつ、表記「毛人」「蝦夷」と呼称エミシ・エゾの起源ならびに意味を細かく論じた。また児島氏の研究は、その後の「北方言語・文化研究会」一九八六年五月例会報告「エゾの語源について」で、さらに具体性を増している[61]。

またこれと前後して、八五年、佐伯有清氏は「蝦夷」ならびに「毛人」表記の起源を論じ、通説化していた高橋説を批判した。[62] その中で佐伯氏は『日本書紀』に見られる表記「蝦蝦」（傍線筆者）に着目する。「蝦蝦」はこれまで見落とされてきたか、もしくは「蝦夷」と同義として疑われなかったが、佐伯氏はこの「蝦蝦」が載っている記事を坂本太郎氏の史料批判研究[63]に基づいて検討し、「蝦夷」表記と異なる意味・異なる成立であることを発表した。

以上の児島・佐伯説などの新視点をはじめ、八〇年代に入って表記・呼称の起源を論じることが再び活発化してきたことは間違いない。

## 二、研究の現状と課題

①最近の古代東北史研究

一九八六年は、八〇年代に入って急激に増加した古代東北史研究の中で、一つの画期であったと言っても過言ではなかった。

まず出版面では、高橋崇著『蝦夷（えみし）――古代東北人の歴史』[64]ならびに新野直吉著『古代東北史の基本的研究』[65]が、五月・七月と相次いで上梓された。前書は高橋富雄著『蝦夷』『古代蝦夷』、虎尾俊哉『律令国家と蝦夷』以来の古代東北通史であり、後書は新野氏自身が「古代東北史の研究において、どのような切り込みをするにしても、是非一度は目を通し、本書を踏まえて前進して頂きたい」と自負しているところの「綜合史」書である。これまで数多くの論考を発表してきた両者の、現時点での集大成とも言えよう。続いて十月には、総論を除いて二十本の論文を収めた高橋富雄編『東北古代史の研究』[66]が出版された。執筆陣は、それぞれの論考に関連した研究をほかにも発表しており、この論文集がそれだけでは完結しない性格のものであることがわかる。また雑誌『古代文化』が二月号で「古代蝦夷小特輯」を、また『歴史評論』が六月号で「特集・北方史の展開と日本社会」を特集として組んだ点も近年には無いことであった。

次に学際面では、七月に開かれた「函館シンポジウム」が注目できよう。[67] このシンポジウムは「前近代における地域・民族・国家を考える―北から見た日本史像の再構成をめざして」というテーマのもとに行われ、その成果は翌年の歴史学研究会大会にも反映されたほか、[68] 二年後の「弘前シンポジウム」、羽下徳彦氏を研究代表とする東北大学文学部の昭和六一・二年度文部省科学研究費補助金（総合研究A）研究『北日本中世史の総合的研究』[69]などへの広がりを見せている。

こうした動きの中、次の②で述べるように、蝦夷の呼称・表記に関する研究にも新たな視点がいくつか導入され始めた。

全体的に見て、北に限らず、地方からあらためて国家や中央を照射する動きは高まっており、重要なことと思われる。しかし、ともすると地方至上主義や「縄文的と弥生的」、「西と東」といった単純二元論に陥る危険性を孕んでいる点には注意しなければならないだろう。[70]

②蝦夷の表記・呼称に関する新視点

ここでは、最近三年間に発表された論考の中から、注目すべきものを幾つか取り上げたい。

まず熊田亮介氏「蝦夷と蝦狄」は、これまでほとんど検討の対象にならなかった表記「蝦狄」を詳細に考察した点と、喜田貞吉氏以来定説として疑われなかった「太平洋側の者が夷、日本海側の者が狄」という点にメスを入れた点で大いに注目すべきものである。[71] すなわち、「『日本書紀』においては、北方の領域における蝦夷と〝アシハセ〟＝粛慎とを峻別したが、『続日本紀』以降、この両者を包含するものとして蝦狄の用語が登場したとみるのが、最も穏当な解釈」と述べているように、「蝦狄」観念の中に「蝦夷とは区別される〝異類〟及びその後裔集団」の存在を設定しているのである。このことは、これまで日本の古代史の中での位置付けが曖昧だった「粛慎」「靺鞨」に関する研究、具体的には津田左右吉氏以来、白鳥庫吉、藤澤義美、池内宏、田名網宏、児玉作左衛門、新野直吉、杉山荘平、平川南、石附喜三男、菊池俊彦、相田洋、菊池徹夫、森浩一、関口明ら諸氏および北方・言語文化研究会等の文献学的・物質文化的研究を、改めて、蝦夷研究＝古代東北史研究の範疇に組み入れる意味を持っていよう。[72] と同時に、近年活発なりつつある阿倍比羅夫北征記事[73]・渡島津軽津司[74]・日渤交渉問題[75]などの検討とあいまって、北方面への「対外関係史」をも開拓する可能性を有している。

二番目に平川南氏「俘囚と夷俘」は、七〇年代末から八〇年代前半にかけて諸氏から発せられた「夷俘」や「俘囚」に関する問題提起と諸説を総括している。これは研究史的に優れているのみならず、前述の関口・吉沢・新野説を止揚し、現在のところ最も矛盾なく、多岐に渡って考察した論考として評価できよう。[76] 加えて新しい視点も多い。例えば「俘囚」の解釈に、小倉芳彦氏による『左伝』の華夷観念の研究[77]を参考に、中国古代社会における「俘」の概念を援用している。「俘囚」の研究はこれまで、「俘囚」と言われる人々の身分、彼らの社会における特種性、彼らに対する政府の施策などが主な研究内容であったが、「蝦夷」表記などと違って、華夷観念に関連づけて検討されたことはなかった。したがって「俘囚」表記の起源・由来が論じられたこともなく、中国文献からのアプローチもほとんどないに等しかった。このほか平川氏は、木簡史料や隼人との比較にも言及している。

この平川氏の研究を受ける形で、平川氏の提起した検討課題を追及したのが古垣玲氏の「蝦夷・俘囚と夷俘」である。[78] 「蝦夷」「俘囚」「夷俘」の使用例と時代に伴う変化を簡潔にまとめ、その変化を律令国家の蝦夷支配の変遷、ひいては蝦夷観の変遷の中から考察している。

三番目に、「夷」表記にはエミシとヒナの二つの意味があり、両者を区別するべき、とした平野邦雄氏「古代ヤマトの世界観」があげられる。[79] これまで「夷」表記について研究されたことはほとんど無かった。その意味でまず重要である。加えて、別稿で詳しくふれるつもりであるが、延暦・弘仁年間を境に「蝦夷」表記が史料から姿を消し、他方で「夷」の使用例が増加することや、近年中世史で盛んに取り上げられている「境界認識」の問題などと関わって、[80] さらに重要と思われる。

四番目に中村光一氏が『類聚國史』に限定して、その史料編纂の目的・経緯・内容の特徴を研究している。[81] 史料批判的研究とともに、今後は、各史料の編纂の目的・経緯・内容の特徴・編纂に携わった人の検討からもアプローチしていかねばならないだろう。

五番目に、菊池徹夫氏の「蝦夷（カイ）説再考」[82] は、これまであまり

深い検討がなされていなかった蝦夷の呼称…特に表記「蝦夷」と呼称カイとの関係や、呼称エミシとアイヌ語エンチゥとの関連を深く切り込んだ論考として特筆すべきものである。この中で菊池氏は神武紀歌謡の「愛瀰詩」がエミシないしはエミスの表音を推定し得る「最古かつ、意外にも唯一の例」と指摘し、記紀に八〇ヶ所以上見える「蝦夷」や「蝦蛦」の表記を何と訓んだか、当初からエミシなどと訓注する例は一ヶ所もない、と述べている。古い時期の「蝦夷」をエミシと呼称することが、半ば当たり前のように定説化している昨今、菊池氏はまさに我々の盲信の恐ろしさを指摘し、それを打破してくれた。また、エミシ→エゾといった呼称の変化の背景に、和人＋アイヌ→アイヌといった変化を考える説に対しても疑問を寄せている。さらに、近世・近代のアイヌに対する呼称としてのカイ・クイの例を検討し、表記「蝦夷」が呼称カイに由来することを仮説として結論づけている。これまで軽視されがちであった呼称カイについて、もう一度深く検討してみる必要性を訴える論考である。ところで、菊池氏の提起したような問題…呼称や表記の起源を突き詰めていく上で、どうしても言語学との接触が必要になってくる。そこで気をつけなくてはならないのは、アイヌ語学の中川裕氏がアイヌ語と日本語を例に、言語間の「相似」「系統」「借用」といった問題の難しさを説いているような視点が、[83]これまでの歴史学者に欠けていたことである。エミシとエンチゥ、カイと「蝦夷」との問題も、その「相似」がどちらか一方から他方への「系統」「借用」だと結論を下すには、現時点ではあまりにも資料不足である。したがって、言語学との慎重な接触の中で、さらに推敲を重ねていくべき問題ではなかろうか。

六番目に、これまで蝦夷論の基礎を作り、数々の定説を生んできた高橋富雄氏が、かねてから自己課題としていた東国問題に取り組んだ結果、「…エゾ問題のナゾを解くカギをいくつもさぐりあてることができたようにおぼえ…」「…東国論、毛野論、エゾ論、みちのく論そろってふり出しから再出発しなければならない性質のものになってしまった」と、持論の転換をはかったことである。[84]小口雅史氏はこの高橋氏の新論の要点を簡潔に次の2点にまとめている。[85]…①「毛人」と「蝦夷」とは別なもので、「毛人」とは毛野国人（狭くは毛野国、広くは東国なかんずく東山道東国をさす）、「蝦夷」とは日高見国（常陸、道奥中心）人である。②訓み方も、「毛人」はエミシ、「蝦夷」はエビスで、「蝦夷」はエミシをエビスと訓ませるための造語で、はじめから貶称である。…高橋氏の試論には仮説的な部分も多く、従いがたいところもあるが、蝦夷の呼称・表記の起源・対象に関する新しい見解として、とりわけ東国問題を視野に入れた研究の必要性を説いた点で、評価すべきものと思う。いずれ稿を改めて検討し、その折に私見も述べてみたい。

③今後への課題

以上、雑駁な論を進めてきたが、最後に今後研究していく上での視点と課題をまとめておきたい。細分すると、次のⅠ～Ⅲのような問題が考えられる。

Ⅰ、表記の研究

（1）「蝦夷」「夷俘」「俘囚」など、これまでにも検討されてき

た表記の研究

…「俘囚」と「夷俘」に関しては、前述したように、最近平川南氏の綿密な研究が報告されているし、「蝦夷」についても児島恭子氏・佐伯有清氏の研究により、具体性を増している。その点は小口雅史氏の研究史整理でも指摘されているとおりである。[86] しかし、後述するA～Eの視点をすべて兼ね備えた研究はまだ見られない。

（2）「蝦狄」「夷」やその他、これまで検討の対象になりにくかった表記の研究

…前述した熊田亮介氏・平野邦雄氏らの研究がこれにあたる。さらに、「東夷」「狄徒」「夷狄」「狄俘」「蝦賊」「夷虜」「蝦虜」「山夷」「田夷」「蛮貊」「醜類」「凶類」「胡虜」「俘虜」などについても、[87] 史料への出現・変遷・消失を今後見ていく必要がある。

これら（1）（2）の点について、次のA～Eの見方が必要と思われる。

A、表記の起源

B、表記の意味する概念の研究

C、表記の変質・変遷

A′、表記に付随するもの（特徴的な氏姓や爵位など）の起源

B′、表記に付随するもの（特徴的な氏姓や爵位など）の持つ意味の研究

C′、表記に付随するもの（特徴的な氏姓や爵位など）の変質・変遷

…近年平野卓治氏が、いわゆる〝蝦夷爵〟について、〝饗宴〟との関連で詳細に論じている。[88] また、上毛野氏との関連から吉彌侯部に論及した黛弘道氏の研究や、[89] 神護景雲三年十一月に俘囚大伴部押人が「俘囚」をを解かれるように願い出て許可された『続日本紀』の記事の不可解な点を、大伴氏の現存系譜の考察から解明した溝口睦子氏の研究など、[90] 関連氏族の研究成果も[100] 重要である。

D、表記相互の関係

E、表記と表記に付随するもの（特徴的な氏姓や爵位など）の関係

II、呼称の研究

A、呼称の起源

B、呼称の意味する概念の研究

C、呼称の変質・変遷

III、表記と呼称の総合的研究

そして今後、以上のI～IIIの研究に共通して必要な視点は、次のような点と思われる。

α、史料批判的検討

…近年、斉明朝の北方遠征記事の検討が、佐藤和彦氏・荊木美行氏[91]・若月義小氏[92]・熊谷公男氏[93]らによって行われているが、それに伴い、特に『日本書紀』の蝦夷関係記事の史料批判的検討が[94] 見直されている。古くは津田左右吉氏[95]・坂本太郎氏[96]による研究

があるが、初期の東北政策を考える上にも、またここで問題にする表記・呼称の起源などを考えるにしても、津田・坂本両氏を継承し、斉明朝のみならず広く史料批判的検討が必要であろう。と同時に前述したように、各編纂物それぞれの製作背景をはじめとした特徴を考慮した上での立論が必要になってきている。

β、華夷思想の研究（「東夷の小帝国」構造の研究・中国史書の吟味）

…石母田正氏以来の研究は、最近では石上英一氏らによって深められている。それらの成果をふまえつつ、さらに〝本家〟たる中国において、華夷思想が表記・呼称にどのように反映しているかを検討する必要があろう。

γ、人種・民族・種族論との慎重な接触

…「蝦夷」とアイヌに見られるような、人種・民族・種族論といったものは、戦後一定の時期敬遠される傾向にあった。しかし、一九七九年に「蝦夷論」の研究史的整理を試みた菊池徹夫氏は、「われわれがこれからとりくむべき」問題として、とりわけ「蝦夷は民族的にアイヌ（系）だったか」という点を重要視すべきと述べている。[97] 菊池氏の指摘するように、「蝦夷」に関していえば、一九七〇年代以降ネオ・アイヌ説が生まれ、再び人種・民族・種族論が再び活発化してきている。その動きは、例えば最近の工藤雅樹氏の論考[98]や、国分直一氏「エミシ、エゾ、アイヌ」[99]などにも見られる。当然、表記・呼称も人種・民族・種族論と関わりを持ってこよう。そうした中、前述した熊田亮介氏の研究は、「蝦夷」のみならず、「蝦狄」に関連して、「粛慎」「靺鞨」に関する人種・民族・種族論的研究を、蝦夷研究＝古代東北史研究の範疇に組み入れる可能性を持っている。「粛慎」「靺鞨」については、これまでオホーツク文化の担い手をめぐる論争の中でしばしば論じられてきた。[100] 具体的には、「粛慎」「靺鞨」「流鬼」「亦里于」「把婁」「勿吉」など中国史書に現れる集団をオホーツク文化の担い手に比定したわけだが、すなわちこうした表記をも蝦夷論の中で取り扱う必要が出てくるわけである。そうなると、問題は北方アジア史まで広がってくる。しかし、ここで気をつけなければならないのは、同じ「粛慎」「靺鞨」でも、六国史など日本の史料と中国の史料では、その表記の指し示す対象集団に相違が存在するかもしれない点である。また仮に同じとしても、史料での表記は、やはりその史料を作成した人々の政治的な観念に基づく集団区分であって、人種論・民族論・種族論とは区別して考えるべきものだろう。加えて、ＩのＣに示したように、一つの表記の指し示す対象も時代と共に変化する場合がある。そうした点には十分留意しなければならない。

今後は以上のような研究課題を踏まえ、蝦夷に関係する呼称・表記の基礎的な考察を行っていくべきであろう。「蝦夷」をエミシと読もうがエゾと呼ぼうが大勢には影響ないという批判も聞いた。確かに言葉尻だ

けにとらわれていては、東北・北海道史を大局的にとらえることは難しい。しかし、細かい呼称・表記に対する認識が研究者間で不統一なために、議論が嚙み合わないことも現にある。一九八八年五月に発行された『歴史評論』四五七号には、「言葉から歴史を考える」とのタイトルで呼称・表記に関する特集が組まれた。そこに所収された論文を見ても、呼称・表記が歴史の変化、特に歴史の中を生きた人々の意識・考えの変化を反映していることは明らかなのだから。

**註**

（1）平川南「俘囚と夷俘」（青木和夫先生還暦記念会編『日本古代の政治と文化』所収、吉川弘文館、一九八七―二）

（2）以下、親族呼称に関しては、明石一紀「日本古代の親族名称（正）―親族構造の基礎分析（上）―」（『民衆史研究』二八、一九八五―五）を参考にした。

（3）「直系型」ならびに「分枝傍系型」の分類については、G・P・マードック『社会構造―核家族の社会人類学―』（内藤莞爾監訳、新泉社、一九七八―八）を参考にした。

（4）東北地方以北の化外の民で、律令国家によって王化されていく人々……というような意味と、とりあえず解釈しておく。

（5）この表で、研究者間を結んでいる横線は、本稿で述べていくような研究視点に基づいて筆者が分類したもので、研究者相互での意見の踏襲や論の引用は、必ずしもあるとは限らないことをお断りしておく。

（6）菊池徹夫「蝦夷論の系譜」（『史観』九九・一〇一、一九七八―十・一九七九―十。その後、同『北方考古学の研究』六興出版、一九八四―一二に収録）

参考までに、菊池氏の時期区分の概略をあげておく。

Ⅰ期…新井白石など近世以降、大正前期（一九一六迄）
　　擦夷主義的アイヌ説の確立

Ⅱ期…一九一七～終戦（一九四四）
　　アイヌ説の全盛（国家主義的日本人説の台頭）

Ⅲ期…戦後～一九五六　「戦後民主主義」的非アイヌ説の展開

Ⅳ期…一九五七～一九七〇　実証主義的「辺民説」の盛行

Ⅴ期…一九七一～現在　「ネオ・アイヌ説」の萌芽

以下多くの面で、菊池氏の時期区分や研究史整理を参考にしている。

（7）沼田頼輔『日本人種新論』（一九〇三）。この資料は直接見ることができず、後掲註9の喜田論文によった。

（8）萩野由之「俘囚・夷俘ノ辯」（村岡良弼編『如蘭社話』三、同盟出版、一八八八―一）

（9）喜田貞吉「夷俘・俘囚の考」（『歴史地理』二三―一・三・五、一九一四―一・三・五。その後、同『喜田貞吉著作集第九巻　蝦夷の研究』平凡社、一九八〇―五に収録）

（10）戦前の蝦夷の呼称起源に関する研究史は、工藤雅樹「古代国家と蝦夷」（『国史談話会雑誌』二三（関晃先生退官記念号）、一九八二―二）によるところが大きかった。

（11）本居宣長『古事記伝』二十七之巻。以下、本居の説はこの著に拠

る。

(12) 村上島之丞（秦檍丸）『蝦夷島奇観』（一七九九）。以下、村上の説はこの著に拠る。

(13) 松浦武四郎『天塩日誌』（一八六一）。以下、松浦の説はこの著に拠る。

(14) 高橋富雄『古代蝦夷―その社会構造』（学生社、一九七四―七）

(15) 佐伯有清「古代蝦夷史についての一考察―「エミシ」の用字を中心として―」（『北方文化研究』一七、一九八五―七）

(16) 喜田貞吉「「蝦夷」から「アイヌ」へ＝名称の変遷」（『東北文化研究』二―一～四、一九二九―四・五・九、一九三〇―三。その後、同『喜田貞吉著作集第九巻　蝦夷の研究』平凡社、一九八〇―五に収録）。喜田貞吉講師「蝦夷について」（東北帝国大学法学部・国史普通講義「日本民族の成立及び発展」、のちに菊池啓治郎編、『北上市立博物館研究報告』六、一九八七―三に所収）

(17) 金沢庄三郎『言語に映じたる原人の思想』（創元社、一九四一―一一）

(18) 和田清「支那の記載に現れたる黒龍江下流域の土人」（『東亜学』一、一九三九―九）、同『東亜史論叢』（生活社、一九四二―一二）、同「唐代の東北アジア諸国」（『東方学』八、一九五四―六）、同『東亜史研究（満洲篇）』（東洋文庫、一九五五―一二）。なお、「骨嵬」以下の（　）内の音韻表記は、菊池俊彦「オホーツク文化の起源と周辺諸文化との関連」（『北海道の研究』第二巻・考古篇II所収、清文堂、一九八四―八）に拠った。

(19) 菊池徹夫「蝦夷（カイ）説再考」（『史観』第百二十冊、一九八九―三）

(20) 児島恭子「エミシ、エゾ、「毛人」、「蝦夷」の意味―蝦夷論序章―」（竹内理三先生喜寿記念論文集刊行会編『竹内理三先生喜寿記念論文集・上巻・律令制と古代社会』、東京堂出版、一九八四―九所収）

(21) 金田一京助『アイヌの研究』（内外書房、一九二五―二）

(22) 坪井九馬三「蝦夷考」（『考古学雑誌』四―三、一九一三―一一）

(23) 大野晋『日本語の起源』（岩波新書青版二八九、岩波書店、一九五七―九）。大野晋、佐竹昭広、前田金五郎編『岩波古語辞典』（岩波書店、一九七四―一二）の「えみし」項など。

(24) 例えば近年の蝦夷関係の単行本から例を拾うと、虎尾俊哉氏『律令国家と蝦夷』（評論社・若い世代と語る日本の歴史10、一九七五―七）海保嶺夫『中世の蝦夷地』（吉川弘文館、一九八七―四）などがこの立場を採っている。

(25) 門脇禎二「蝦夷の叛亂―その前章―」（『立命館文学』九六、一九五三―五。その後、同『日本古代政治史論』塙書房、一九八一―三に収録）。当時、他にこうした「蝦夷じしんの歴史」の視点を持った研究例には、井上光貞「陸奥の族長、道嶋宿禰について」（古代史談話會編『蝦夷』朝倉書店、一九五六―五所収）がある。

(26) 高橋富雄「邊境における貴族社会の形成―古代陸奥における改氏姓の意義―」（『歴史』一二、一九五六―三）。高橋氏は「俘囚」について二通りの解釈を試み、「俘囚ということが、歸降蝦夷一般の

呼稱になったときに於ては、俘囚というのが、果して「服属の進んだ」ということを主内容としたか、それとも、歸降した夷地よりの民、ということを主に意味しているかは、文献に即して再検討してみる必要もあるのではないか」と述べている。換言すれば、前者の「俘囚」は未服蝦夷に対して優位性を持ち、後者は律令公民と対比してその劣性を意味する表記と言えよう。内民化過程にある蝦夷からすれば、自分に対して称される「俘囚」という語に抱く感情としては後者であろうし、ここにも「蝦夷それじしんの歴史」的視点が反映されている。

(27) 高橋富雄「古代蝦夷の政治的社會」(『古代學』五―三・四、一九五七―四)

(28) 大塚徳郎「丈部・吉彌侯部について」(『歴史』五、一九五三―三)

(29) 大塚徳郎「蝦夷服属の類型的考察」(同『平安初期政治史研究』第四章　蝦夷征討　第二節、吉川弘文館、一九六九―三)、同「蝦夷服属についての一考察」(伊東信雄教授還暦記念会編『日本考古学・古代史論集』所収、吉川弘文館、一九七四―二)、同「古代陸奥国における部姓民について」(平重道先生還暦記念会編『東北の考古・歴史論集』所収、宝文堂、一九七四―一一)。また、以上の総括的な論考として「みちのく古代の民」(同『みちのくの古代史』第三章　刀水書房、一九八四―一七)がある。

(30) 平安時代に入ると「夷俘」が「俘囚」と同義で用いられている例が見られる、というもので、これらは「夷俘」と「俘囚」の混用問題とか誤用問題などと称され、その理由をめぐっていくつかの論が出されている。混用(誤用)とされた根拠をもう少し具体的にまとめると、

①同じ対象を指すと思われるものに対して、「俘囚」「夷俘」(「俘夷」)「夷」の二～三通りの言い方がなされている。

②「俘囚」的・「蝦夷」的な氏姓と、蝦夷爵・位階・冠される「俘囚」・「蝦夷(夷)」の矛盾。

③『類聚國史』巻百九十風俗部において「俘囚」の項に「夷俘」も記されている。

の三点となる。

(31) 『日本歴史大辞典』(河出書房、一九五六―七)の「夷俘」項。なお、一九八五年一月に刊行された普及新版でも同様である。

(32) 『國史大辞典』(吉川弘文館、一九七九―三)の「夷俘」項。

(33) 遠藤元男編『日本古代史辞典』(朝倉書店、一九七四―一一)の「夷俘」項。

(34) 瀧川政次郎「攝津職の夷俘」(『續日本紀研究』五―二、一九五八―二)

(35) 高橋富雄(前掲註32)。「夷俘」が「俘囚」の別名と考えられる説を紹介している。

(36) 新野直吉(前掲註33)。高橋氏同様、「夷俘」と「俘囚」が同じに扱われるケースにふれている。

(37) 清水潤三「蝦夷の文化とその種族―文献に基く文化の復原を中心として―」(『史學』二五―三、一九五二―三)、同「再び蝦夷につ

いて」（『史學』二九―三、一九五六―一二）、同「文献に現われた蝦夷の分類的稱呼について―異文化共存に関する一試論―」（『史學』三三―一、一九六〇―一二）、同「東北地方における考古學の成果と蝦夷の種族論」（『史學』三三―二、一九六一―二）

(38) 「山夷」と「田夷」については、これ以降も「山」と「田」に着目し、生産形態の比較から帰服の度合い（「田夷」の方が度合いが強い）へと論を進めるのが一般的だった。この点も重要だが、「山夷」「田夷」とも「夷」であって、「俘」（「俘囚」）ではない点は注意する必要があろう。また、農耕が「田夷」と呼ばれる蝦夷のみの特権ではないことは、『続日本紀』天平宝字二（七五八）年六月辛亥条、『類聚國史』巻百九十・弘仁七（八一六）年十月辛丑条、『類聚三代格』巻十九・延暦六年正月廿一日太政官符などからわかる。

(39) 大野晋『日本語の起源』（前掲註(23)）

(40) 板橋源「蝦夷爵考」（『岩手大学学芸学部研究年報』三巻第一部、一九五二―六）

(41) 野村忠夫「律令勲位制の基本問題」（同『律令官人制の研究』、吉川弘文館、一九六七―六）

(42) 高橋富雄『蝦夷』（吉川弘文館、一九六三―一〇）

(43) 石母田正『日本古代国家論』第一部（岩波書店、一九七三―五）

(44) 『講座日本歴史②古代2』所収（東京大学出版会、一九八四―一二）

(45) 『講座日本歴史②古代2』所収（東京大学出版会、一九八四―一二）

(46) 林陸郎先生還暦記念会編『日本古代の政治と制度』所収（続群書類従完成会、一九八五―一一）

(47) 田名網宏編『古代国家の支配と構造』所収（東京堂出版、一九八六―三）

(48) 田名網宏編『古代国家の支配と構造』所収（東京堂出版、一九八六―三）

(49) 『日本の社会史』第一巻　列島内外の交通と国家所収（岩波書店、一九八七―一）

(50) 『國學院大學大学院紀要』文学研究科第十八輯（一九八七―三）

(51) 高橋富雄編『東北古代史の研究』所収（吉川弘文館、一九八六―一〇）

(52) 関口明「八・九世紀における移配蝦夷の実態」（『日本歴史』三五七、一九七八―二）

(53) 吉沢幹夫「俘囚長についての試論―「夷俘」の再検討を通じて―」（『東北歴史資料館研究紀要』四、一九七八―三）、同「俘囚長についての再論―俘囚長論の前提について―」（『東北歴史資料館研究紀要』六、一九八〇―三）

(54) 新野直吉「古代俘囚論」（『日本歴史』四三八、一九八四―七）

(55) 平川南「俘囚と夷俘」（前掲註(1)）

(56) 岩口和正「日本古代身分制についての覚書（その二）」（名古屋歴史科学研究会『歴史の理論と教育』五五、一九八二―九）

(57) 小林茂文「古代国家の民衆教化と風俗」（民衆史研究会編『民衆

生活と信仰・思想』、雄山閣、一九八五―一一所収）

(58) 新野直吉「山夷と田夷」（大林太良編『日本古代文化の探求蝦夷』所収、社会思想社、一九七九―九）

(59) 児島恭子「エミシ、エゾ、「毛人」、「蝦夷」の意味―蝦夷論序章―」（前掲註(20)）

(60) 工藤雅樹「古代国家と蝦夷」（前掲註(10)）

(61) 児島恭子「エゾの語源について」（早稲田大学語学教育研究所北方言語・文化研究会・一九八六年五月例会報告…於・早稲田大学…）なお、報告要旨が、田村すず子幹事「北方言語・文化研究会成果報告（18）一九八六年四月―一九八七年一月」『早稲田大学語学教育研究所紀要』35（一九八七―一二）に所収されている。

(62) 佐伯有清「古代蝦夷史についての一考察―「エミシ」の用字を中心として―」（前掲註(15)）

(63) 坂本太郎「日本書紀と蝦夷」（古代史談話會編『蝦夷』朝倉書店、一九五六―五所収、その後、同『日本古代史の基礎的研究　上文献篇』東京大学出版会、一九六四―五に収録）

(64) 中公新書八〇四（中央公論社、一九八六―五）

(65) 角川書店、一九八六―七

(66) 吉川弘文館、一九八六―一〇

(67) 函館シンポジウムは北海道・東北史研究会主催で一九八六年七月二六～二八日、函館大学で開催された。シンポジウムの報告は同会編『北からの日本史』（三省堂、一九八八―五）として刊行されている。工藤敬一「紹介　北海道・東北史研究会編『北からの日本史』」（『歴史評論』四六九号、一九八九―五）や真栄平房昭「書評　北海道・東北史研究会編『北からの日本史』」（『歴史学研究』五九五号、一九八九―七）に紹介がある。北海道・東北史研究会はその後も研究会を幾度か重ね、一九八八年七月二三～二五日には弘前シンポジウムを、一九八九年七月二九～三十日には本荘シンポジウムを開催している。

(68) 伊藤喜良「日本中世における国家領域観と異類異形」（『歴史学研究』五七三・増刊号、一九八七―一〇）など

(69) 昭和六一～六二年度科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書（課題番号六一三〇一〇四〇）『北日本中世史の総合的研究』（研究代表者・羽下徳彦、発行・東北大学文学部、一九八八―三）

(70) こうした二元論的な考えのすべてを否定するわけではないが、近年の梅原猛氏・高橋富雄氏の研究に対しては、もう少し慎重になるべきであるとの感想を抱いている（梅原猛・高橋富雄編『シンポジウム東北文化と日本』、小学館、一九八四―一〇、高橋富雄『地方からの日本史』NHK市民大学講座テキスト、一九八七―一〇、など）。個人的には都出比呂志「歴史学と深層概念―日本文化の歴史的分析の手続き―」（『歴史評論』四六六、一九八九―二）などの見解に共感するところが大きい。

(71) 熊田亮介「蝦夷と蝦狄」（高橋富雄編『東北古代史の研究』、吉川弘文館、一九八六―一〇）

(72) 津田左右吉「粛慎考」（『日本古典の研究』下所収、岩波書店、一九五〇。後に『津田左右吉全集』一、岩波書店、一九六三―一〇

に収録）。白鳥庫吉「粛慎考」（『歴史地理』一七―一、一九一一―一、後に『白鳥庫吉全集』四、岩波書店、一九七〇―五に収録）。藤澤義美「奥羽古代史に於ける『粛慎』の史的意義」（『季刊　岩手史学研究』一、一九四八―九）。池内宏「粛慎考」（『満鮮史研究』上世編所収、祖國社、一九五一一九）。田名網宏「阿倍比羅夫の渡島遠征について」（『日本歴史』六六、一九五三―一一）。児玉作左衛門「阿倍臣比羅夫の渡島遠征に関する諸問題」（『北方文化研究』四、一九七〇―三）。新野直吉『古代東北史の人々』（吉川弘文館、一九七八―六）。杉山荘平「阿倍臣比羅夫粛慎征討考」（『海事史研究』八、一九六七―四）。平川南「多賀城碑文の諸問題―真偽の論点をめぐって―」（宮城県多賀城跡調査研究所『研究紀要』二、一九七五―三）。石附喜三男「考古学からみた〝粛慎（みしはせ）〟」（大林太良編『日本古代文化の探求　蝦夷』所収、社会思想社、一九七九―九、後に同『アイヌ文化の源流』、みやま書房、一九八六―一〇収録）。菊池俊彦「オホーツク文化に見られる靺鞨・女真系遺物」（『北方文化研究』一〇、一九七六―一二）。相田洋「エミシの文化と東北アジアの文化」（『中嶋敏先生古稀記念論集』上巻所収、汲古書院、一九八〇―一二）。菊池徹夫「靺鞨とオホーツク文化」（『三上次男博士頌寿記念東洋史・考古学論集』所収、朋友出版、一九七九―三、後に同『北方考古学の研究』六興出版、一九八四―一二に収録）。森浩一「九世紀の石鏃発見記事とその背景」（同編『同志社大学考古学シリーズⅠ・考古学と古代史』一九八二―一〇所収）。関口明「古代蝦夷の毒矢使用に関する一考察」（榎本守恵博士退官を祝う会編・発行『歴史と心（榎本守恵博士退官記念論文集）』所収、一九八八―四）。北方言語・文化研究会編『民族接触―北の視点から―』（六興出版、一九八九―七）。

(73) 後出註（91）～（94）参照

(74) 新野直吉「古代史上の津軽」（『弘前大学國史研究』七〇、一九八〇―四）、渡部育子「律令制下の海上交通と出羽―古代出羽における海上交通の意義をめぐって―」（田中喜男編『日本海地域史研究』七、文献出版、一九八五―七）、松原弘宣「渡嶋津軽津司について」（同『日本古代水上交通史の研究』付章、吉川弘文館、一九八五―八）など。

(75) 新野直吉「古代交通史上の日本海北部」（田中喜男編『日本海地域史研究』二、文献出版、一九八一―二）、渡部育子「日渤交渉と出羽」（半田教授退官記念会編『秋田地方史論集』所収、みしま書房、一九八一―二）など。

(76) 例えば坂上康俊氏は、平川氏の論考を「（俘囚・夷俘）概念の時期的変化を説く点に特長があり、また先行研究への批判も説得的である。かかる基礎的な研究がまだまだ積重ねられる余地があることを実感した。」「（　）…筆者注」と、評している。（坂上康俊「書評　青木和夫先生還暦記念会編『日本古代の政治と文化』」、『史學雑誌』九八―二、一九八九―二）

(77) 小倉芳彦「裔夷の俘」（同『中国古代政治思想研究』所収、青木書店、一九七〇―三）

(78) 古垣玲「蝦夷・俘囚と夷俘」（東北大学文学部国史研究室古代史

研究会『川内古代史論集』四、一九八八―一二）

（79）平野邦雄「古代ヤマトの世界観―ヒナ（夷）・ヒナモリ（夷守）の概念を通じて―」（東京女子大学読史会『史論』三九、一九八六―三）このほか「ヤマトから見た「東国」とは何か」（『季刊・明日香風』二一、一九八七―一）、「いま歴史学から〈古代〉を見る」（『國文學・解釈と教材の研究』三二―二、一九八七―二）にも同様の見解を述べている。

（80）大石直正「外が浜・夷島考」（関晃教授還暦記念会編『関晃教授還暦記念　日本古代史研究』所収、吉川弘文館、一九八〇―一〇）、村井章介「中世日本列島の地域空間と国家」（『思想』七三二、一九八五―六）、黒田日出男『境界の中世　象徴の中世』（東京大学出版会、一九八六―九）、斉藤利男「境界都市平泉と北奥世界」（高橋富雄編『東北古代史の研究』所収、吉川弘文館、一九八六―一〇）、同「古代・中世の交通と国家」（『日本の社会史　第二巻　境界領域と交通』所収、岩波書店、一九八七―一一）など。「夷」には〝エミシ〟と〝ヒナ〟の意味があり、どちらも都人にとってのいわばウチとソトの認識だが、それは平面的な空間構造としてもとらえることができる点で、上記の研究との接点がある。

（81）中村光一「『類聚国史』「風俗部」における「蝦夷」と「俘囚」」（木本好信編『古代の東北―歴史と風俗―』所収、高科書店、一九八九―五）

（82）前掲註（19）。

（83）中川裕「日本語とアイヌ語との相似語彙」（『季刊邪馬台国』三八、梓書院、一九八九―三）

（84）高橋富雄「古代エゾ論の転換―毛野・東国・日高見論―」（『福島県立博物館紀要』一、一九八七―三）。

（85）小口雅史「「蝦夷」表記論の新展開」（弘前大学人文学部特定研究報告書『文化における「北」』所収、一九八九―三）。ただし本文中の（　）内に筆者が若干の加筆を行っている。

（86）前掲註（85）。

（87）これらの初出は、「東夷」（『日本書紀』景行天皇二十七年二月壬子条）、「狄徒」（『続日本紀』霊亀元年十月丁丑条）、「夷狄」（『同』養老七年九月己卯条）、「田夷」（『同』天平二年正月辛亥条）、「狄俘」（『同』九年四月戊午条）、「蝦賊」（『同』宝亀六年三月丙辰条）、「夷虜」（『同』延暦二年六月辛亥条）、「蝦虜」（『同』八年七月丁巳条）、「山夷」（『日本後紀』延暦十八年三月壬子条）、「蛮貊」「醜類」（『三代実録』元慶二年三月二十九日条）「凶類」（『同』二年四月二十八日条）、「胡虜」（『同』二年六月八日条）、「俘虜」（『同』二年八月四日条）、である。

（88）平野卓治「日本古代における位階と「蝦夷」」（前掲註50）

（89）黛弘道『上毛野国と大和政権』（上毛新聞社、一九八五―一二）

（90）溝口睦子『古代氏族の系譜』（吉川弘文館、一九八七―一二）

（91）佐藤和彦「斉明朝の北方遠征記事について」（『歴史』五七、一九八一―一一）

（92）荊木美行「阿倍比羅夫の蝦夷征討をめぐる問題―丸山二郎氏「斉明紀に於ける阿倍臣の北進に就いて」の再検討―」（『史境 en

Marge de l'Histoire』七号、一九八三―一〇）

（93）若月義小「律令国家形成期の東北経営―その実態と特質―」（『日本史研究』二七六、一九八五―八）、同「阿倍氏の航跡―東北経営と「越」―」（『季刊・明日香風』二四、一九八七―一〇）

（94）熊谷公男「阿倍比羅夫北征記事の研究史的検討」（『東北学院大学論集　創立百周年記念　歴史学・地理学』一六所収、一九八六―三）、同「阿倍比羅夫北征記事に関する基礎的考察」（高橋富雄編『東北古代史の研究』所収、吉川弘文館、一九八六―一〇）

（95）津田左右吉「東國及びエミシに關する物語」（『津田左右吉全集』第一巻、第二篇第三章、岩波書店、一九六三―一〇）

（96）坂本太郎「日本書紀と蝦夷」（前掲註（63））

（97）菊池徹夫「蝦夷論の系譜」（前掲註（6））

（98）工藤雅樹「日本列島における諸民族の形成」（菊池啓治郎学兄還暦記念会編集・発行『日高見国―菊池啓治郎学兄還暦記念論集―』所収、一九八五―一二）、同「民族論における蝦夷とアイヌ」（高橋富雄編『東北古代史の研究』所収、吉川弘文館、一九八六―一〇）

（99）国分直一「エミシ、エゾ、アイヌ」（江上波夫編『民族の世界史2　日本民族と日本文化』第Ⅲ章　民族の形成と展開　2、山川出版社、一九八九―二）

蝦夷の中にアイヌ語を用いる人がいたことは確かだと思うが、蝦夷＝アイヌと短絡的に割り切ることができない点は、以下の文献で簡単に述べたことがある。荒木陽一郎「古代北方社会解明へ向けて」（北海道・東北史研究会編『北からの日本史』（前掲註（67））所収、同「蝦夷」（菊池徹夫・福田豊彦編『よみがえる中世［4］北の中世津軽・北海道』所収、平凡社、一九八九―八）

（100）オホーツク文化の担い手をめぐる論争は、菊池徹夫「北方文化論」（桜井清彦・坂詰秀一編『論争・学説　日本の考古学』第一巻・総論所収、雄山閣、一九八七―九）に詳しい。

（付記）

本稿は、一九八八年一月に学習院大学大学院に提出した修士論文の第一章に若干の加筆・訂正を行ったものである。『國史研究』誌上に掲載させていただくにあたっては、弘前大学の小口雅史先生に大変お世話になった。記して感謝する次第である。

（追記）

校正中に、新野直吉氏の新しい著作『古代東北の兵乱』（吉川弘文館、一九八九―一一）が上梓された。また「俘囚」について扱った関口功一氏の論文「日本古代の「移動」と「定住」」（『歴史学研究』五八一、一九八八―六）の存在を知った。本稿と関係するところがあるが、本文中でふれられなかった点をおことわりしておく。

（神奈川県・私立武相高等学校教諭）